

ニュージーランドの大学のバリアフリー

宮本 忠

三重大学大学院人文社会科学部研究科教授

1 序

1 論文の背景

1・1 個人的背景

1996年4月から97年3月の一年間、ニュージーランドのリンカーン大学で研究する機会を与えられた。このときに二つの個人的体験をした。

一つは、視力をほとんど失ったこと、そして

二つは、リンカーン大学やオタゴ大学のすばらしいバリアフリー化に気づいたこと、である。視力をほとんど失った体験での研究活動と後述するように、私のかねての研究関心そして時代の変化が、この論文を書く動機となった。

1・2 論文の位置づけ

このころ、日本において、国においては、ハートビル法(高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する法律1994年)が制定され、他方、地方公共団体において、福祉のまちづくり条例が急ピッチで制定され、バリアフリー化政策が進行しつつあった。そのような中で、私のバリアフリー研究が始まった。

地方自治体行政と環境行政について研究してきた私にとって、バリアフリー研究は、私の新しい研究の発展である。当然、その研究は、従来の研究の進化を目指す。

1・3 研究の限定

この論文は、つぎの限定の下で用意される。

- ① リンカーン大学とオタゴ大学に研究対象を絞る。
- ② 視覚に障害をもつ学生に焦点を当てる。
- ③ 大学の教育・研究環境について論じるものとする。
- ④ 本稿は、私のニュージーランド現地調査に基づいている。現地の人々の協力のたまものである。特に、リンカーン大学のトン・バース博士とオタゴ大学障害学生オフィス長のドナ女史には、お世話になった。

2 大学のバリアフリーの意味～教育を受ける権利、学問の自由そして機会均等

障害をもつ者が、障害を持つというだけの口実で、「教育を受ける権利」、「学問の自由・機会均等」が大学において奪われているならば、それは、その大学の存在根拠に関わ

る本質的な問題である。なぜならば、そのような大学は、学問の自由、教育を受ける権利を、特定の者、一般に、いわゆる健常者のみに、付与しているにすぎないからである、これが、障害者に対する、大学の差別の問題の一つである

3 障害学生へのバリア

ここで、障害学生とは、大学において、教育を受ける、学問をするに際して、大学自身が、教育を受ける者、学問をする者に障壁をつくり、かれらが社会的に不利な状態におかれている者をいう。つまり、感覚的、身体的、精神的な障害を持つという理由だけで、大学がかれらを不利な状態におき、そこで学ぶことができない、あるいは困難な状態にある学生をいう。

障壁を、バリアとってよい。障害学生が大学で学び、研究するためのバリアに次のものがある。たとえばー：

●物理的バリア

視覚障害学生の学内移動が、通路に机、椅子がださされているために、それらがバリアになり、学内移動が危険な状態。車椅子学生にとっての階段など。

●制度的バリア

障害学生を支援する事務機構がないなど、大学の事務管理システムの欠陥のために、授業や試験を受けることができない。入試制度も場合によってはバリアとなる。かつて多くの大学で行われていた、いわゆる色盲の者の入学制限や拒否など。障害のある者が入学試験を特別に設けられた試験場で受験できても、入学後の大学の支援システムがなければ、合格しても教育をうけることが困難では、これも制度的バリアである。

●心理的感情的無意識的バリア

これは人が障害者学生に対してもつ心理的感情的バリア。障害学生に対する、いわれなき偏見、差別、権利侵害、無知など。障害をもつ学生自身も、潜在的にもちうるバリアである。たとえば、視覚障害者のために、点字ブロックを敷設していても、その上に、自転車や工事用の道具が放置されているのは、点字ブロックに無知なるゆえの無意識的バリアといえよう。

以下、ニュージーランドの大学のバリアフリーについて、考察する。

4 リンカーン大学の場合

リンカーン大学は、ニュージーランドで、八つある国立大学のうちの、一つである。カンタベリー平原の牧草地帯にある。ニュージーランドの南島、最大の都市・クライストチャーチ市に隣接する。1878年設立の農業学校が、その前身である。1961年に、カンタベリー大学に統合されたが、1990年のニュージーランドの大学の改革とともに、リンカーン大学として独立した。

私は、ここの環境センターで客員教授として、1996年4月から97年3月まで仕事をす
る機会をあたえられた。個人的になってしまうが、この一年間に、すっかり目を悪くして
しまった。帰国後、白内障の手術をうけ、それ以来、外出には白杖を使用している。

当時、私は、ニュージーランドの資源管理法および地方自治を主として研究していたの
であり、バリアフリーに特に強い関心をもっていたわけではない。しかるに、先に記した
ように、私の個人的体験と日本におけるバリアフリー化の動きに直面し、環境の側面から
バリアフリーを研究の対象に加えることにした。

リンカーン大学のバリアフリーの状態は、次のようである。

●物理的バリアフリー：

建物には、スロープが設置され、図書館、校舎等へは車椅子で入ることができるし、
障害者用駐車場もある。自転車は整然と管理され、キャンパス通路には、自転車は
見られない。

●制度的システムのバリアフリー：

リンカーン大学では、身体障害学生のための、サービス・システムをもつ。ボラン
ティアが、かれらをヘルプすることは、しばしば見られるが、これは、ありふれた
この大学の情景である。ボランティア活動は、ボランティアの好意に支えられてい
る側面があり、障害学生の支援として、不安定な面があることは否定できない。大
学がシステムとして、かれらの勉学のために支援などのサービスを提供することが、
教育をうける権利を具体化するためにも、絶対に必要である。これは、大学の努力
目標という種類のものではなく、大学の当然の義務である。

●ノートを取るシステム

もし、学生が、ノートを取ることに問題があるならば、総括的教育調整担当職員(In
clusive Education Coordinator)が個々の学生の状況に応じて、ノートを取ることに
ついて助けるシステムができています。

●朗読者・筆記者

朗読者・筆記者とは、試験問題を読み、あるいは学生の答えの口述を筆記する職員で
ある。

●音声拡大のためのループ(無線補聴)システムズ

無線補聴システムとは、聴覚に困難がある学生が、教員がマイクで講義をするときに、アンテナと音量調節付きの補聴器で当該学生が聴講するシステムのことである。スチュワード・ビルディングの講義室に、このシステムが設置されている。

●タイプ、コピー及び書写

ノートをタイプし、コピーし、それを機械によって点字に翻訳し読み上げるシステムを図書館に用意している。

以上は、視聴覚に障害のある学生へのリンカーン大学のサービスの一部である。

- 乳幼児をもつ障害のある学生には、リンカーン大学幼児ケア・センターがあり、一歳から五歳の子供の世話と教育を、月曜から金曜まで、午前八時から午後五時まで行っている。大学で勉学するに当たって不利のある学生に、不利にならないように学習・研究ができる大学自体のシステムが出来上がっている。(Kimberley da Silva, 1996; Information Booklet for Students with disabilities: Lincoln University, NZ)

●心理的感情的無意識的バリアフリー

教職員も一般学生も障害者を特別視する雰囲気はないように見えた。

前述したように、私は、リンカーン大学での客員教授の途中ですっかり目を悪くした。しかし研究に特別の支障はなかった。図書館に入り、入り口のドア付近でモタモタしていても、そばにいる学生がすぐに私の目の悪いことに気づき、用件を聞き、テキパキと対応してくれた。いつもである。図書館の職員も、気持ちよく図書館利用に手を貸してくれた。これは一般サービスだと思うが、貸し出し係りの職員に電話し、探したい図書をいっておくと、あくる日には私の研究室の机上にその関係図書が積み上げられ、数日後に、さらに新たな関係図書がとどけられることもあった。キャンパスで、道に迷っても、すぐにだれかれとなく声をかけてくれ、親切に案内してくれた。

5 オタゴ大学の場合

オタゴ大学は、ニュージーランドの南島のその南の中心都市、ダニーデン市に所在する。リンカーン大学が、こじんまりとした、新しい大学であるのにたいし、オタゴ大学は、キャンパスも広大な大学であり、キャンパスに清流が流れている、1869年に創立された、ニュージーランドで最古の、歴史と伝統のある、国立の総合大学である。最初は、オタゴ地方条例によってつくられた。オタゴ地方で唯一の大学である。

私は、かつて、先に見たリンカーン大学で仕事をしていたときに、観光で、また、その

後、研究調査で、ここでお世話になった（1999年）。しかしこのときには、まだ、私は、バリアフリーの研究に従事していなかった。2000年8月に、はじめて、オタゴ大学のバリアフリーの調査に出かけた。以下は、そのときに得た資料に多くを依拠する。

5・1 障害学生支援週間

著者がオタゴ大学のバリアフリーの調査でこの大学を訪問したとき、偶然にも、オタゴ大学では、その一週間、障害者学生支援週間となっていたのは幸運であった。毎日、そのための行事が行われていたからである。たとえば、ディベート、フォーラム、補助器具説明会、支援交流パーティーなど。当然、できるかぎり参加した。障害学生はもとより、一般学生、教職員、市民などで大変活発な議論、交流がなされていた。そのうちのいくつかを紹介しながら、大学のバリアフリーについて考えよう。ここでは、先のリンカーン大学の事例との重複をできるだけ避ける。

●早朝パーティー

障害学生支援・交流早朝パーティーは、障害学生支援・交流週間の初日の朝7時30分から講義の始まる8時30分までであった。（2000年8月21日）南半球のニュージーランドの八月といえばまさに真冬。オタゴ大学の所在するダニーデンはニュージーランドの南端の都市の一つである。日本でいえば、南は暑い、暖かいというイメージであるが、南半球のニュージーランドにおいては、南へ下がれば下がるほど気温は低い。ダニーデンの冬の午前7時半は、まだ薄暗い。私は妻と出席することにした。暖冬ということで雪はなかったけれど「こんな冷たく、薄暗い早朝に参加者があるのだろうか？」数日前の8月18日、オークランドからクライストチャーチへ飛んだとき、ニュージーランド・アルプスであろうか、雪をかぶっている山々を見下ろし、娘が歓声をあげたのをおもいだしながら、大学のパーティー会場へ徒歩で向かった。ダニーデンには、日本流の視覚障害者用の点字ブロックはない。けれども、たとえば、大学近くの道路には、交差点では「横断オーケー」のときにピュロピュロピュロとなる音響設備がところどころ設置され、横断歩道の端には白杖で確認できる突起を設けてある。道路の曲がり角にもその種の工夫がしてある。繁華街にも音響交差点があるが、場所により音響を変えてその交差点がどこかわかるように、音で判断できる工夫がなされている。

パーティーの開始の10分前の7時20分頃に会場の教室〔1階〕に着いた。入り口には、受付があり、そこで資料を受け取った。参加者はほんの少しの感じ。受付の机の上には、カンカンがおいてある。会費は無料だが、参加者はそのカンの中へチャリンと小銭を入れている。つまりドネーション〔寄付〕である。私どもも、みんなに見習って小銭を入れた。ニュージーランドではよく見られる情景である。会場内を小銭の入ったカンをガチャガチャならして、寄付を集めて歩く場面も、この

国ではおなじみである。私たちが着いたときはまばらだった人も、8時頃には、かなりの人になった。様子がわからないので隅っこの椅子に座っていると、車椅子の人、盲導犬を連れた視覚障害者、白杖の人も混じりにぎわしくなってきた。係りの人がサンドイッチや飲み物などを持ってきてくれた。いわゆる立食パーティーである。参加者もそれぞれに軽食をみんなのために持ってきているようだ。この朝食には、大学からの補助金がでていたときいた。これも、ニュージーランドでよくみかける風景である。パーティーがたけなわになったころ、大きな拍手が三回打たれ、誰かが挨拶を始めた。耳を傾けていると「今朝は三重大学の宮本教授もここに参加しています」といわれ、われに返った。単なる参加者という意識できていたのでびっくりした。隣の学生に「さっき挨拶したのは誰？」と聞いたら「副学長」というこたえが返ってきた。挨拶にもあったように、オタゴ大学はこうした側面にも力を入れていることに深い感銘を受けた、と同時に、冬のまだ薄暗い早朝、授業の前に、これだけの大学関係者が集まるエネルギーに、率直に驚いた。

●難聴留学生の報告会

難聴のアメリカからの留学生の報告は大きな耳の模型を使って行われた。生まれつき強度の難聴だったのに、最近できた耳の中に埋め込む補聴器によって、生まれて初めて人の声をクリアに聞くことができた感激を報告した。現代テクノロジーの発展は、従来の障害者の有りように変革を迫る。終わったとき、ドナが宮本教授は目が悪い。模型を教授のところへ持って行き説明したら、とアドバイス。小生の机の上に大きな模型が置かれた。彼女は小生の手をもち、模型の説明部分をさわらせ、一所懸命説明してくれた。質問もにぎやかであったが、教室全体で考え、知識、情報、テクノロジーを分かちあうという形である。

●ディベート

夜、大学大教室で開催されたディベートのテーマは「障害者と健常者は、どちらが進化しているか」というものであったらしい。‘らしい’というのは、私には、このテーマの意味が、案内パンフレットを見ても、よくわからなかったからである。2、3の人に説明を求めても、はっきりと理解できない。要するに、これは、大変、哲学的、宗教的な大テーマ(?)であることが、ディベートを聞いているうちにぼんやりとわかってきた。私が、それまで考えたことがなかった興味ある論点であった。他方、障害者、健常者が入り混じって、壇上で論争されたが、単に静かに話し合うというのではなく、プレゼンテーションもすばらしいものであった。手を振り上げ、声の調子を変え、自己の主張を力いっぱい述べる。フロアでは、主張に賛成であれば、拍手し、床を踏み鳴らす。なんとも、にぎやかで、楽しいイベントであった。教育の違い、力を実感したものである。

5・2 オタゴ大学障害学生オフィス

今回の調査でお世話になるオタゴ大学障害学生オフィスへ、到着の挨拶に出かけた。日本からすでに連絡をとっていたところであり、早朝パーティーを組織したオフィスである。約束の午後2時すぎセンターに入った。一階のかなり大きい部屋だった。オフィス長のドナ他、三人のスタッフが忙しそうにテキパキと事務をとっている。ドナは、彼女自身が車椅子に乗って仕事をする手足ともに障害をもつ身体障害者である。電話、パソコンを巧みに使い、部下にテキパキと指示を与え、また車椅子で生き生きとキャンパスを移動していた。多忙な日常業務をこなしながら、小生の次のような調査日程を一部のスキもなく計画してくれた。早朝パーティー、医学部眼科部長へのインタビュー、渉外担当教授との昼食、大学図書館視察、障害者関係ディベート、補助器具の説明会への参加、盲人財団、ダニーデン市市営住宅部での会見などなど。それに、大学院地理学研究科での公開セミナーの小生の担当まで企画してくれ、私は、予定外のセミナーまで受け持ち、日本の環境問題について講義する羽目になった。また、このオフィスには、支援の言葉をプリントしたTシャツもあり、日本でこれを着てくださいとプレゼントされた。他に小生のような低視力者用の特製のボールペンもプレゼントされ、その至れり尽くせりのサービスに、またまた率直に驚いた。著者が勤務する三重大学との協定大学であるオーストラリアのタスマニア大学の障害学生支援センター長は、資格障害者である。ニュージーランドやオーストラリアでは、このように、障害をもつ学生へのサービスには、障害をもつ職員をあてている。適材適所というか。これはきわめて大切な視点、発想である。人というものは、同じ状態・境遇でないと、なかなか他人を理解できないし、適切なサービスも困難な動物であるからである。かれらは、人間や仕事を実によく見、研究していると思う。

5・3 大学図書館

著者が訪問したとき、新図書館が建設中であつたがセンター職員に案内してもらった。独創的というべき障害者学生用の配慮があつた。たとえば、図書館内に日本の温泉やホテルの浴室などでしばしば見られる、マッサージ機が置いてある。これは、読書に疲れた学生が肩をほぐすためにおいてあるという。障害を持つものは疲れやすいという考えからきている。同じ発想のものに、こんなものも置いてあつた。調理に使うオープンと水の入った枕のようなもの。これは、枕を暖め、疲れた身体の部分にそれを当てる。これらは、障害学生オフィス長のドナ女史の発想と聞いた。こうした提案を取り上げる大学当局の姿勢、しなやかな判断力による予算化は貴重である。

5・4 ゴードン眼科部長との会見

難聴報告会の後は、医学部ゴードン眼科教授との会見であつた。大学病院へは、ドナ女史が車椅子の学生を案内役につけてくれた。彼はキャンパス、町の中をスイスイと車椅子で行く。というより走る。車椅子がこんなに早いとは知らなかった。ついてゆくの苦勞

した。ゴードン教授は、ロービジョンクリニックの重要性、政府が研究費を出すべきこと、スウェーデンの視覚障害者政策など貴重な情報を与えてくれた。かれは、盲人協会の会長もしている。

5・5 大学外機関との連携～ダニーデン盲人財団

イ 大学行事への盲人財団の協力

盲人財団（ダニーデン）は、視覚障害者にとって、ある意味では眼科より頼りにされている。ここでは、盲人・視覚障害者への啓蒙・教育、情報提供、訓練、補助具などの提供・技術指導・販売、支援を実施しているからである。ダニーデンの盲人財団は、設立後の歴史が浅いが、ニュージーランド盲人財団は100年の歴史をもつ。したがって、ダニーデン盲人財団は、ノウハウをニュージーランド盲人財団から受けついでいる。

障害をもつ学生が大学で学び研究するためには、コミュニティーのバリアフリーも重要な条件となる。ダニーデン盲人財団は、オタゴ大学との連携がある。たとえば、先の大学障害者支援週間に、盲人財団（ダニーデン）から、盲導犬と生活をともにする財団の女子スタッフが講師として出演し、視覚に障害をもつ学生などに、生活の質について話していた。また、ダニーデン盲人協会の会長は、オタゴ大学眼科、ゴードン教授である。

ロ 大学ロービジョン・クリニックと盲人財団

完全失明者や現代眼科学で不治・難病とされている視覚障害者にとっては、眼科よりも、盲人財団のような支援・教育組織の方が、かれらにとって力強い。そのようなことから、盲人財団と一般の眼科医とのつながりは薄いという。しかし、最近、日本でも、注目されてきた、ロービジョン・クリニック（低視力眼科）とは密接な関係をもっている。ロービジョン・クリニックでは、従来の単なる眼科的治療だけではなく、歩行訓練などのリハビリテーション、補助器具の始動、福祉・生活相談までを含む業務を行っているからである。そのようなことで、盲人財団との関係が密接になっていると思われる。ちなみに、盲人財団の長は、先に紹介した、オタゴ大学医学部の眼科部長ゴードン教授である。教授は、ロービジョン・クリニックの第一人者である。（2000年8月現在）

6 結びに買えて ～ オタゴ大学の障害学生についての考え方

新しいリンカーン大学でも、伝統ある総合大学のオタゴ大学でも、障害をもつ学生に対して、その研究・勉学の機会均等に努めていることは、明らかである。そのポリシーは何か。最後に、オタゴ大学の障害学生支援のソフト面、人的側面と原理的側面からこれを検討する。

6・1 障害学生への人的支援

オタゴ大学では、障害をもつ学生について、支援オフィスをもつことは、すでにみたが、ここではその体制をソフトの側面から考察する。

オタゴ大学には、障害をもつ高校生で将来、大学で学ぶことを希望している高校生に向けて、オタゴ大学自身が発行している『Challenge Yourself』(2000年; 70ページ)がある。これが、実によく編集され、工夫がなされている。紙、印刷にもお金をかけている。以下、これを紹介しながら、考察を続ける。

さて、障害学生オフィスの説明であるが、小冊子の冒頭はこうである：

「障害学生オフィスは、障害学生について、その困難の状態を克服し、かつ、支援するために、一所懸命仕事をしています。」(リズ)。左の()内は、障害をもつ在学生の略称である。「職員は、みなさんに、実に良いアドバイスをします。— アドバイスの種類、それは、あなたの勉学にとって決定的なアドバイスです。」(ケート)。「障害学生オフィスにすれば、私に、障害をもった学生がたくさんいることを悟らせます。障害をもっているのは、自分だけでないと知るのは良いことです。」(メラニー)

以上は、障害をもつ在学生が、オフィスの有り様を、オタゴ大学へ進学することを希望する障害をもつ高校生に、語るという形式である。それでは、オフィスの仕事の様子を見よう。

「障害学生オフィスの仕事は、障害をもつ学生への、幅広いサービスと支援です。障害学生コーディネーターは、最初に接触するに適切な人です。彼女は、身体的、感覚的、学習、心理的、医学的、そして精神的に障害をもつ学生のために、サポート、アドバカシー(権利侵害などの援助)、およびアドバイスを与えます。一時的に障害をもった学生も支援します。勉学のための計画について、準備や援助をすることも彼女の役割です。」

「最も重要なサービスの一つは、オフィスが、障害をもつ学生に行う学習援助サービスです。障害学生チューター・コーディネーターは、障害学生のためにノートをとったり学習の手助けをしたり、また試験のための支援を含むサービスをアレンジ(調整)します。詳細は、このハンド・ブックに書いてあります。参照してください。」(同上、24頁。)

このように、高校生にわかりやすく、職員の仕事を説明している。

6・2 障害学生行動グループ

障害学生オフィスは、大学が専任職員を配置する常置オフィスであるのに対して、以下のものは、大学そのものの機関ではないが、障害学生を勇気づけ、大学生活の質の向上を、かれらにもたらすものであろう。

オタゴ大学障害学生行動グループ(OU DAG; 障害学生行動グループと略す。)は、学生や職員で組織されている学内NPOである。メンバーには、障害をもつ者もいるし、そうでない者もいる。かれらは、支援とアドバカシー(権利侵害などの援助)を提供する。このグループは、公式のものではない。が、誠実に、その任務を果たしている、と大学では評価している。

障害をもつ学生が、オタゴ大学に入学するときに、障害学生行動グループに加入することは、いいアイデアである。なぜなら、大部分の行動グループのメンバーは、かつて、新入生であったからである。かれらは、どうすれば、大学の勉学のみならず、キャンパス

生活がうまくゆくか、を知っている。かれらは、あなたがたを、支援し、友人を紹介し、そしてアドバイスすることができる。行動グループは、新入生が、大学において、初めてお互いに出会うのに、よい場所である。行動グループは、学期中、月1回、障害学生オフィスと関係して会合をもつ。ニュース・レターを定期的に発行している。この購読希望者は、障害学生オフィスに申し出ればよい。問い合わせは、障害学生コーディネーターへ。(同上、25頁)。行動グループは、大学の機関ではないが、大学と、いま流行の言葉を使えば、まさに、協働しているのである。

6・3 メンターリング

・プログラム

オタゴ大学障害学生行動グループは、Mentoring Programme を創設した。というのは、グループが、障害をもつ学生の中には、最初、大学での勉学に適応することが困難な学生がいることがわかったからである。プログラムは、新入生を、経験をもつ、メンバーである学生あるいは職員に合わせる。その新入生は、先輩の学生などから、大学で生活することについてのアドバイスを、問題の焦点—支援、情報、友人など—に合わせて受ける。新入生ごとに、異なる Mentoring Programme が、用意される。各プログラムは、カウンセルを含む専門的な観点から作成され、学生の問題に応じて、異なる到達点が設定され、問題の解決にあたる。問い合わせは、障害学生オフィスの障害学生コーディネーターへ。(同上、26頁。)

障害学生が、大学生活の質的向上のために自主組織をもち、おそらく、大学オフィスだけでは、支えられない点を、行動グループとタイアップして問題の解決に対応しようとしているところに。私は、オタゴ大学の学生サービスの質をみる。

6・4 大学の障害学生についての教育方針

以上のようなオタゴ大学の障害学生支援システムは、いかなる観点到に立脚するものであろうか。

前掲小冊子の冒頭の言葉に、オタゴ大学の、障害をもつ学生に対する明確な考え方をみる。すなわち、オタゴ大学は、

- ① さまざまなタイプの学生のニーズに答える。障害は個人個人で異なり各々のニーズは異なる。
- ② 異なる障害者学生は、それぞれ固有の選択がありうる。
- ③ オタゴ大学は、視覚障害、難聴、肢体不自由など、さまざまな障害のグループに対応するために、students with disabilities (障害をもつ学生) という用語を使う。

ここに、著者は、オタゴ大学は、障害は各自別のものであり、「障害者」という概括的で無内容な一般的用語を使用していないことをしる。障害は一人一人異なるのに、障害者と一まとめにいう言い方の危険性をこれによって解消できる。また、このように認識することによって、各学生のニーズに適正に対応できる。

「勉学は厳しい、大学はサポートします。」

さらに、小冊子の序文でオタゴ大学の障害者学生への態度が以下のように示されている。
「あなたには、夢がありますか。目標は？ 望みは？ あなたの求めるものが将来の経歴であれ、またあなたが新しい挑戦や興味をもとめているにせよ、オタゴ大学はあなたに何かを与えることができます。オタゴ大学で勉学することは、エキサイティングなことです。オタゴ大学はあなたを新しい挑戦にいざないます。そしてあなたに、それぞれの価値ある技量を提供します。あなたは障害があるので、オタゴ大学で勉学することは難しいと思い込んでいるかもしれませんが。障害がなければ、楽に勉学できると思っているかもしれませんが。それは真実ではありません。勉学は、誰にとっても難しいものです。よい成果は、厳しい勉学の結果なのです。」

大学の勉学は、決して一人でできるものではない。学生生活のための計画が必須である。
「大学での成功の鍵は、組織と計画にあります。大学が勉学のためにどんな資源やサービスを提供するのか、また、誰がサポートしてくれるのかを見出すことが大事です。大学で学ぶ計画を立てるのに早すぎることはありません。この小冊子に、大学の資源、サービスそしてサポーターが記されています。」

さらに、小冊子は、大学内 NPO にも触れる。

「オタゴ大学にはあなたを代弁してくれる行動グループも活動しています。」

しかし、大学での勉学にとって、最も基本的なことは、自己決定、自己責任である。

「ここで掲載されている資源やサービスをあなたは選択できます。そしてキャンパスの、どのサポーターとコンタクトをとるかは、あなたが決めることです。」

障害を、どのように生きるのかは、個々人の人生観、哲学の問題であり、大学は学生のプライバシーには介入しない。

「あなたが障害があることをあきらかにするかどうか、あなた次第です。」(同上)

(2003年3月22日記す。)

The Barrier-Free System of Universities of New Zealand

Prof Tadashi Miyamoto, PhD

Mie University

Faculty of Humanities and Social Sciences

- 1 Introduction
 - 1.1 Personal Background of this article
 - 1.2 Changes of Age
 - 1.3 Limits of the Article

- 2 Meaning of Barrier-Free of Universities

- 3 Barriers to Students with disabilities

- 4 Lincoln University

- 5 University of Otago
 - 5.1 Disabilities Week
 - 5.2 Disabilities Office
 - 5.3 University Library
 - 5.4 Interview to Prof Godon
 - 5.5 Blind Foundation of Dunedin

- 6 Conclusion· Policy of Disabilities of Otago University
 - 6.1 Human Support
 - 6.2 OU Disabilities Action Group
 - 6.3 Mentoring Programme
 - 6.4 Principle